

## 「人間五十年」―七里ガ浜高校8期生同窓会に寄せて

石川 雅之

七里ガ浜高校8期生のみなさん、本日はおめでとうございます。二〇〇人に迫る参加者数となった同窓会、素晴らしいですね。また、今年は皆さん、五十歳という区切りの齡。いずれの人も、それぞれの分野の中軸として、さまざまな形である意味、人生の佳境を迎えていることと思います。皆さんの大切な高校時代のほんの一瞬间にだけ一緒にさせていただいたばかりのような者にまで今日はお声掛けくださり、こうしてお招きいただきましたこと、心から御礼申し上げます。発起人、幹事のみなさん、本当にご苦労さまです。

皆さんとの詩の授業がきっかけで山内真澄さんと一緒に作った「七里ガ浜セレナーデ」が流れる中、泣きながら皆さんとお別れた昭和六十一(86)年の春から、ぼくは寒川高校へ新任として着任し、七年経って、平塚江南へ移りました。そこで十年勤務したあと、県の事務職として小田原の西湘地区行政センターに出向、その三年後に教育委員会へ異動。議会や広報主任の仕事をして平成二十年四月から上矢部高校教頭で学校に戻り、その後、深沢高校、金井高校、旭高校、鎌倉高校で副校長を務め、この三月に定年退職しました。

ぼくの五十歳は、そうした経緯の中で教育委員会に勤務していた当時のことになります。その誕生日を間近に控えた夏頃のことでした。この前の都知事選に出馬した鳥越俊太郎氏が、ソフトバンクの孫正義氏のバックアップで、インターネット新聞を立ち上げるという話が新聞紙上を賑わせました。いくつかの理由があって当時の上司と県の人事課にお伺いを立て、お許しをいただき手を挙げて市民記者として関わることになりました。ただ、教育や政治的な記事は書かない。オフ日限定の、自分の趣味であるエンターテイメント分野専門の記者という扱いで、週一回のペースで映画や演劇のレビューを書き始めました。

鳥越氏が編集長となったインターネット新聞は、世間を騒がした割には短命に終わり、二年ほどで廃刊になりました。その後、しかし、その二年で繋がった多くの

関係者のお世話もあって、次々出来ては消えるネットメディアで映画評、舞台評を書き続けました。三年前には、長らく六本木で秋に開催され、今年三十回目の記念開催となる東京国際映画祭で、その年新設されたWOWOW賞選考委員の一人となり、タキシードでレッドカーペットを歩くという幸運に恵まれました。新設の賞ということでWOWOWとしても大々的に宣伝しようというスタンスだったのでしよう、一時的なドキュメンタリー番組も作られ、ほんの一瞬、芸能人気分も味あわせてもらいました。それまで誠実に活動を継続させたことへの褒美だった、と思っています。

「人間五十年」――これは織田信長の逸話としてよく知られた幸若舞「敦盛」の一節です、と書くのにわかには国語の授業のようでしょう。「化転のうちにくらぶれば」夢まぼろしのごとくなり一度生を得て滅せぬものあるべきか」と続いて、若かりし頃の信長の強い決意を象徴するものとして喧伝され、本能寺の変が信長四十八歳だったこともあり、ついにそこへはたどり着けなかった大きな夢として、しばしば語られます。

超高齢化社会となって、いまや、人生五十年、などという人は誰もいません。けれども、ひとつの大きな節目ではあると、経験則として捉えています。そのあたりまでは誰もが、がむしゃらにやってきて、初めて終わりを真剣に考え始めるのが五十という年齢ではないでしょうか。少なくともぼくはそうでした。大きな会社に勤めている人は、そのまま残るか、転籍するか、という選択をする頃合いでもあるでしょう。社会的状況だけでなく、老眼とか更年期とか、身体的にも徐々に微妙な変化が始まって、明らかにソフトチェンジを実感する年齢だと思います。

このままじゃいけない、とぼくは五十を迎えようとする少し前から切実に焦燥感を持ちました。教師を全うできることは素晴らしいことだけれども、それだけでいいのだろうか。趣味である読書や映画・演劇・音楽鑑賞をますます充実させて、家庭生活もそれなりに整え、子育てもひと区切り。このまま妻とともに老齢を迎え、やがて与えられた命を全うする。それまでは、ぼんやり遠くにあったものが、突如、現実味を帯び始めました。このままぼくは、平庸な一市民として、幸福な人生だった、それでよかった、そう受け入れていくのだろうか。

自分が非凡な存在だ、などと自惚れているわけではありません。冷静に、客観的に見返してみればみるほど、ぼく自身はごく一般的な教育公務員のひとりだと思

ます。その自分史評は今も変わりません。けれども、そう受け止めた上で、自身の世界の規模、人とのつながりの有り様を見つめ直した時、なんと小さく、範囲の限定されたものでしかないのだろう、そう深いところで慨嘆せずにはいられなかったのです。

ぼくには何があるだろう。一途にひた走った教職という世界で生み出され、育まれた人間関係、周辺現況、向こう十年ほどのうちに定年となる、いま歩いてこの道の、周囲やその先にあるものは何だろう。上司は書道家でもあった。友人はバンドマンでもある。また、別の友人は山岳家である。ヨット乗りの知人もいる。高校での教育実践とは別に、地域で子どもたちの育成に奔走している同僚もいる。東南アジアの環境改善のため早くからNGO活動に従事している友人、などなど、ふと気づいて見渡してみると、精勤する職域とは異なる場を充実させている人のなんと多いことか。その友人、知人はみな等しく生業（なりわい）として携わる職域において高く評価される実績を積み、その上で、さらに充実した定年後にも継続可能な領域を耕し続けている。そうした周囲の友人、知人と比べて、ぼくはどうだ。それは、実に深刻な問題意識となったことでした。新たなメディアの立ち上げに、迷わず手を挙げる必然性が整っていたのです。

五十歳からの十年間、ぼくは公教育の管理職として精勤しました。特に最後の勤務校となった鎌倉高校では、副校長ながら生徒たちと深くコミットして、これ以上ない退任式を経験させていただきました。そして、この十年間、映画や演劇のレビューをほぼ継続的に書き続けて、週一本の割合で年にして五十本、十年で五百本、おそらくそれ以上の論評、紹介記事を、すべて編集者に目を通してもらってwebに上げて来ました。ブログ発信ではなかったことが重要です。そのおかげで、それまでは全く関ることのなかった業界の人々と親密な関係を築くことができましたし、物の見方も、遅まきながらいくらか多面的、重層的になりました。二つの領域を結びつけた生徒たちに貴重な経験の場も提供できた。ちょうど今の皆さんの年齢の時に感じた焦燥感が、ここまでの十年間に、それまででは思い描くことのできなかつた人生の形をぼくにもたらしてくれたのです。

今日の同窓会に、お言葉に甘えて参加させていただいたのは、そのことを五十歳を迎える皆さんに伝えたかったからです。

それでもうひとつ。七里ガ浜高校でぼくと関わった人はみんなご承知のように、ぼくは、江ノ電に乗って稲村ガ崎の駅を過ぎて目に飛び込んできた夕暮れの相模湾に一撃されて、この地で高校の教員になると決めて、今日までの日々を積み重ねて来ました。皆さんとの一年二ヶ月は、ぼくにとつて極めて重要な時間でした。五十歳という一つの大きな節目のこととともに、その端緒となった機縁も是非再確認して、改めてお礼を申し上げたい。そう思って、今日はこうして参加させていただき、きつとそれを話し出すときりががないと思って、この「学級通信」風の文章を用意してきました。

退職にあたり、ぼくは、以上書いたような経緯もあり、六十歳からは教職とは異なる場で仕事をしてみようと、あれこれ、お声がけいただいた方と様々なお話をさせていただきました。ほぼ決まりかけたものもありました。大人の事情でひっくり返った話もあります。いろいろなことが二転三転して、あれこれ呻吟し思い悩んでいたある日、下の息子とそのお嫁さんが、ぼくに、こう言いました。別業種に転じようとする親父の気持ちに分からなくはない。けれども、望めば向こう五年間、ほぼ無条件で教壇に立てるなら、なぜそれを大事にしないの。教師は天分だと、言っていたじゃないか。別業種への転身は、今とるべき選択ではないだろう。

びっくりしました。そして嬉しかった。ぼくは、息子とお嫁さんからの言葉に深く打たれて、そうだもう一度、教壇に帰ってみよう、そう考え直しました。そのための原点を確認してみよう、そう思って、取り出したのは、七里ガ浜高校のPTA会報に寄せた文章でした。それを読み返しながら少し膨らませて、自分自身を見つめ直す機会にしました。

書きあがったものを丁度年明け募集があった幻冬舎の『』コンテストに送ってみたところ、幸いなことに入選となり、定年後の選択を後押しされた気分でした。

四月からは、そういうわけで、十五年ぶりの教壇復帰。川崎にある大師高校で、国語教員として全学年を教えています。毎日、楽しくやっています。

今日は、本当にありがとうございます。皆さんの、ますますのご活躍、ご発展を心より祈念申し上げます。

追記 過去記事のアーカイブは、こちら。もし興味があおりましたら。

<https://kamakurah.wordpress.com/>